

【市政懇談会 質疑応答】 コアかがやき（平成 25 年 8 月 6 日（火） 18:30）

【参加者 A】

駅前がとてもさみしい。もう少し元気が出る、という風にならないのかと思います。歩いてもシャッター街になっているし、歩きたくなるような雰囲気にならないのかと思っています。

【市長】

駅周辺についての検討は、昭和 48 年ころから議論がありました。駅の高架化については、平成 19 年に商工会議所の皆さんなど、団体の皆さんと作った委員会の中で 2 つの案が提示されましたが、市としては財政難の中で、どちらの案も選択できないという結論になっていました。

しかし、3. 1 1 の東日本大震災の後、北海道の新しい津波シミュレーションでは、平地の地域を含め 12 万 5 千人の方が浸水地域になることで、避難路を確保する必要が生じました。その結果、北大通はビルがあるから大丈夫ということではなく、避難路は基本的に徒歩ですが、現実、車で逃げていくことも想定しなければなりません。新たに防災という観点から駅高架の事業化というのは可能かというところで、いま、検討をしているところでございます。27 年までが財政健全化に向けての重点取組期間ですから、その中でしっかり取り組みをし、その時まで市としての考え方を出していきたいと思っております。

駅周辺の問題については、しっかりと検討しているところでございますので、もう少しお時間をいただきたいと思っております。

【参加者 B】

忙しい中、先日は、美原ふれあい祭りに来ていただいて、ありがとうございました。

私たちの地域は 30 年が過ぎまして、本当に高齢化が進んでおり、いろいろな問題が出ております。その中でも、ある程度高齢の方たちは、生きがいを持つと元気になるというのを感じます。ふれあい祭りで役割分担を持ってやるときには、年齢を感じさせないで元気にやっている高齢者の姿を見ると、今後多くの高齢者が生きがいを求めていくものと思っております。

それと、安心して暮らせる都市づくりということでは、今までは美原地域は浸水地域にならないだろうということでしたが、北海道から出された津波シミュレーションを見ると美原地域も例外ではなく、浸水地域に入ることが報道されました。

そこで、昨年、町内会が中心になって、一度是非、避難ということを経験してくださいと呼びかけ、避難訓練を実施しました。地域で 120 人くらいの方が集まり、社協からレスキューキッチンを借りてカレーを作り、市の防災担当者から講話をいただき、避難ということについて一通り実施しました。

実際、やってみると、まだまだ分からないことがある、と感じました。昨年は地区会館の絨毯の上に避難しましたが、実際に避難する場所である小学校や中学校の体育館の固い床の上に避難してみると、避難の際にどういうものが必要かということも検討する機会になると思っています。できるだけ現実に即した、例えば、車いすを使ったり、一人暮らしの方にどのように声をかけるのいいのかということを検討しながらやりたいと思っています。そこで、日にちが合えば、学校を貸していただけるようにお話をしていただければ助かります。また、市の備蓄品などの活用を含めて、どういうものが避難の際に有効だということがあれば、教えていただきたい、と思います。

【市長】

ふれあい祭りでは、子どもたちもたくさん参加し、警備もお年寄りの方が元気に行うなど、とても良いものであると感じました。

地域の高齢化への具体的な対策は、まだ持っていない段階ですが、全国的に見ても一斉に高齢化が進んでいくということが課題になっています。その中で、先進地での取り組みなどを参考に、どのようなことを健康確保のためにやっていくかということは、個別に地域に入った中で相談しながらやっていきたいと思っています。

防災に関しては、体育館の利用については問題ないと思いますので、そこは日程調整ができるようにします。

また、体育館の固い床という話がありましたが、現在、王子マテリアルと市で一緒に段ボールのベッドを作っております。高さや組み立て方法など意見を出し合いながら、作っておりますが、実験的に学校の防災キャンプで使うことも考えておりますので、まずは、必要最低限のものを持ってきていただくこととなります。

他に、これからは情報が重要になってくると考えています。3. 1 1のとき、避難所でのテレビは、東北の惨状ばかりで地元のニュースがまったく流れませんでした。

その結果、釧路は午後11時半が最大の津波(2.1メートル)でしたが、午後4時くらいが最大の避難率で、その後、多くの方が家に帰ってしまいました。これは、地元のニュースがまったく流れなかったことも大きな要因であると考えています。

そのため、現在FMくしろと協働し、地元の情報を流すというしくみを構築しましたので、それぞれがラジオを聴いていただければ、地元の情報が得られるということになります。

【参加者A】

防災に関して、両親が高齢のため、3. 1 1の時に「避難してください」という放送は聞こえたが、実際、避難したくても動けないので避難しなかったと聞きました。私も道路が寸断されていて、行きたくても親のところにも

行けませんでした。動ける人は良いのですが、動けない人たちへの対応はどのように考えていますか。

【市長】

自助・共助・公助という仕組みの中で、災害時に一番重要なのが「共助」だと考えています。釧路には要援護の方やお手伝いが必要な方々が浸水地域に、福祉部の把握で約800人弱の方がおります。

市ではこれまで支援の必要な方には、市が直接支援し、避難する方法をとっており、3.11の時では10人を避難させるのに2時間かかりました。一方、市内で町内会と連携して避難所まで連れて行くことにしている地域があり、その地域では2人の方を避難させるのに20分かからないということがわかりました。

非常時において、市ですべてをやっていくのは無理なことであります。北海道で示された新しい津波シミュレーションは到達時間が30分であり、20分程度で対応しなくてははいけません。そうすると、共助を活用し、町内会の皆さんに協力いただいて避難を進めていく仕組みを作っていく必要があると感じております。市役所で保有している要援護の方々の情報は、個人情報保護法がありますから、誰にでも情報は流せないのですが、災害避難支援協働会を組織することで情報を共有することが可能となります。

町内会の加入率が50%を切っているという課題もありますが、やはり災害の際には共助が重要となります。

【参加者C】

地元にお金を落とすというのは大事な話で、愛国地区では、10年前には16の老人クラブがあり、800人の会員がございましたが、現在は14のクラブ、600人の会員となっています。

秋の旅行は、ほとんど北見、網走、知床などに2泊でいくというのが10年位続いており、お金はほとんど向こうの地域で使っております。釧路ではせいぜい、赤いベレーカリフレに行く程度です。市内の老人クラブでは、リフレで敬老会をやる程度で、ほとんど市内で高齢者がお金を使いません。

高齢者が地元で観光など楽しく過ごしてもらいたいことを考えてもらいたい。高齢者にいかに楽しみを与えるのか、というのが重要だと思いますので、阿寒湖畔などを含めて、もう少し工夫していただきたい。

【市長】

具体的に、どのようなことを希望するのかを教えてください検討していきたいと思っております。地元には、阿寒湖畔や赤いベレーなど機能を充実させてきておりますので、ぜひ活用していただきたいと思っております。

【参加者D】

オホーツク圏では夏季にスポーツ合宿でたくさん人が来ています。気候が温暖で、環境も整っているそうです。ラグビーでも20団体ほどきており、市でも送迎などの助成をするなど、さまざまな相談に乗っているとも聞いております。また、釧路町には柔道のチームが合宿しています。気候では北見・網走よりも涼しいくらいですし、釧路でも施設を作ったり、宿泊施設とのアクセスも考慮して、1つでも2つでも多くのチームに来ていただけるようにする考えはありますか。

【市長】

スポーツ合宿については、釧路でも昔から取り組んでおり、施設との連携からアイスホッケーの受け入れが多くなっています。オホーツク圏はまさにラグビーの施設が整っています。釧路でも過去には大学のラグビーチームが来ていたことがあり、当時は助成も行っていました。釧路町では柔道、別海町ではマラソンなど、それぞれの地域が得意な分野で力を入れているというのが現状だと思います。釧路では、亜細亜大学の野球部の受け入れが今年で4シーズン目になりますが、どうしても、競技と競技を行う施設との関係があると思っています。例えば、亜細亜大学の野球部が来ていただいておりますので、同じリーグの大学に来てもらうと練習試合もできる、など、実績に関連したことを進めていきたいと思っています。

【参加者B】

高規格道路のインターチェンジを避難場所ということも考えているようですが、実際に完成するのは2年先ですし、災害がいつ来るのかわからない状況の中で、徒歩で到達できる何かがあるといいな、という声が町内会です。インターチェンジができるまでの間、災害避難用に徒歩で行ける通路を先行して作れないか、と多く聞きます。今、柵があり上がれない状況ですので、階段でも作れないでしょうか。

【市長】

階段など作ったとしても、インターチェンジが完成するまでの管理などの課題もあり、難しい問題であると思っています。市内では、12万5千人の方の避難場所として16万人分の施設を用意しておりますので、この地域では公住などの地域の避難施設を活用していただきたいと考えております。

【参加者C】

関連して、文苑地区は、公立大が避難場所ですが、3千人、4千人の人が公立大に避難できるのでしょうか。

【市長】

公立大学においては、もちろん大丈夫です。市では、12万5千人の避難者に対する避難場所を示しましたが、今後も増やしていこうと考えています。実際の避難人数を示しながら、皆さんの不安を払しょくできるようにしていくように努力していきたいと思っています。

現在、北海道が示した新しい津波シミュレーションに基づいて防災ハザードマップを作成していますが、国の中央防災会議では、今年から新しいシミュレーションを行うという発表をしています。これが2年くらいで出来上がると思います。国のシミュレーションが発表され、現在の北海道が示した内容と異なる場合、また変わる可能性がありますので、市としてもなかなか取り組みにくい状況であります。今は、北海道の出したシミュレーションに基づいてやっていくしかないという背景がありますことをご理解いただきたいと思います。

防災に係る地域説明会の際には、忌憚のないご質問をいただき、私どもの方で回答をして、皆さんの不安を払しょくしていきたいと思っていますので、よろしく願いいたします。

【市長】

本日は、大変、お疲れのところ、ありがとうございます。防災が関心の中心となっていることを強く感じましたので、皆さんの不安を払しょくしていくために努力してまいりたいと考えております。今後ともよろしく願いいたします。